

# アクションリサーチを用いた シードントップのオリンピック教育の実施過程とその結果

—— 東京都世田谷区立における小学6年生の3学期末の学年合同スポーツ大会を活用して ——

和田 博史<sup>1)</sup> 根本 想<sup>2)</sup> 大川 裕太<sup>3)</sup>

## The Implementation Process and Effects of Siedentop's Olympic Education through Action Research:

Utilizing the Final Joint Sports Festival of the Third Semester of  
Sixth Graders in Setagaya-ku, Tokyo

Hiroshi Wada So Nemoto Yuta Okawa

### Abstract

**Background:** Sports competitions have always been at the end of the third semester of sixth graders in Setagaya-ku, Tokyo. However, they were not interesting. The development of Olympic education in Japan didn't lead to improvements in physical education, and Siedentop's Olympic Education has not been utilized in Japan. **Purpose:** The purpose of this study was to clarify the implementation process and effects of Siedentop's Olympic Education through action research. **Data collection and analysis:** The participants were three elementary school teachers (three teachers had never conducted sports education; teacher A was 31 years old, teacher B was 27 years old, and teacher C was 52 years old), 106 students from three sixth-grade classes, and an action researcher (31 years old). The study period covered six lessons from February 8 to March 12, 2017. Data were gathered from 26 video-recorded lessons, 21 interviews, 16 field journal entries, and 721 student descriptions of each lesson obtained from a questionnaire. Data were analyzed deductively according to the key aspects of the research question through qualitative analysis. **Results:**(1) Regarding the process of the relationship between the teachers and researcher, the researcher attempted to understand the situation at school and reduce the burden on teachers; the intervention was practical and useful according to the teacher's actual situation; and (2) There was a learning process to promote the diverse value, a tendency for an improved attitude toward lifelong sports.

**Key words:** Olympic education, Sport Education, lifelong sports, quality research,  
supporting sports

**キーワード:** オリンピック教育, スポーツ教育, 生涯スポーツ, 質的研究, 支えるスポーツ

1) 育英大学教育学部教育学科児童教育専攻  
2) 育英短期大学現代コミュニケーション学科  
3) 東京都目黒区立八雲小学校

## I 研究の背景

理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である。よりよい理論ほど実践的である。これらの言葉は、アクションリサーチや場の理論を展開した社会学者レヴィンによるものである。教育界においても、学術的に優れた授業理論や主張が論じられようと授業で実現できなければ空虚であり問題となる。その点に関して体育分野では、学校現場での授業研究を通した多くの効果検証により、改訂され高く評価されている理論がある。それは、英語圏の体育界を牽引したシーデントップらによるスポーツ教育モデルである（高橋, 2002；岡出, 2010；Metzler, M, 2014；和田, 2016）。

保健体育の学習内容は生涯スポーツの振興に向けて幅広くなろうとしている。というのも、我が国では第2期スポーツ基本計画（スポーツ審議会, 2017）が示され、するスポーツだけでなく、みる・支えるスポーツの参画人口の増加が強調されるようになった。新学習指導要領においても、重要事項となる体育の見方・考え方の中では「自己の適性等に応じたする・みる・支える・知るの多様な関わり方と関連づけること」が明記されている。この多様なスポーツ参画人口の増加に向けた授業モデルを展開するのも、スポーツ教育モデルである。

一方で、我が国のスポーツ界では東京2020オリンピック大会を控えている。そのため、学校教育はオリンピック教育を施し、そのレガシーを多様な形で引き継ごうとしている。例えば、オリンピック選手による講話やオリンピックに関する国際理解の学習やドーピングや平和に関する学習などが実践されてきた（JOC, 2016）。しかし、学校現場の教師によって生涯スポーツの振興に向けた体育の授業改善や、フェアプレイの学習に関する体育の授業改善に対する取り組み事例や研究は少ない。ただし、体育の中でオリンピック教育を展開する際に、シーデントップのスポーツ教育モデルの中で位置づけられているオリンピック教育

の活用の有益性が和田（2018）によって指摘されている。それは、みる・支えるスポーツの学習だけでなく、フェアプレイの学習や生涯スポーツを促進する祭典的な学習環境づくりについて有益な示唆をもたらすという。いわば、シーデントップのオリンピック教育は、我が国のオリンピック教育に向けた授業改善とともにみる・支えるスポーツの学習について示唆を与えるよりよい理論であるとされている。

だが、我が国のオリンピック教育の推進に向けたシーデントップのオリンピック教育の活用実践例は少なく、どのように導入・実施しているのか、また理論と実践の接続に関しての知見が明らかにされていない。そのうえ、スポーツ教育モデルを用いた授業改善の導入は、困難であり教師の価値観や力量との適応とともに研究者との連携体制に左右される（Casey, A, 2014）。そのため、研究者と学校現場の教師がスポーツ教育をどのように連携し、その効果を及ぼしたのか明らかにすることは有益な知見となる。

以上のことから、本研究の問題にはシーデントップのオリンピック教育の実施過程と結果の明確化を位置づけた。そして、スポーツ教育モデルという理論と実践の実施過程の明確化をもたらす手法には、アクションリサーチが有効と考えられた。アクションリサーチは、理論と実践の接続過程や数値で明らかにできない質的な過程に関して、有益な知見を生み出すことができる。また、アクションリサーチは学校教育への柔軟な適用可能性と貢献的側面が強い研究立場にあり、問題や実態に応じて修正や授業改善できる。そのため、学校関係者との連携も円滑に図り、当事者たちの世界や文脈について理解を深めることができる。これらのことから本研究は、シーデントップのオリンピック教育の実施過程とその結果について、理論と実践を関連づけていく教師と研究者の関係とみる・支えるスポーツの学習に対する質的知見をもたらすことが期待される。

## II 研究の理論的枠組みと目的

本項では、まず授業改善の方法に関する立場を示し、シーデントップのオリンピック教育の特徴とその課題を示して本研究の具体的な問題を設定する。

授業改善の有益な方法は、大きく3つに整理できる。1つ目は、優れた指導モデルを考案し実施・模倣して修正していくことである (Metzler, M, 2011; Lund, J, Tannehil, D, 2015)。2つ目は、優れた教師の資質能力を特定して教員養成スタンダードを策定し、それに応じた教師教育プログラムを開発していくことである (NASPE, 2009; 岩田, 2011; コルトハーヘン, F, 2010)。3つ目は、各学校を基盤に同僚性やその組織を軸にして授業改善を図る方法である (レイブ, J, 1996; 佐藤, 2006)。それゆえ、効果的に授業改善を進めていくには、この3つの授業改善の方法が一体となって連動して機能することが期待されよう。

これに関連して、スポーツ教育モデルの先行研究では授業成果だけでなく、教師の反応や実行可能性や教師教育も捉えて研究されている (Macphail, A, Deenihan, J, 2017)。また、共同学習モデルの授業改善では、学校特有の文脈も含めた職場環境を検討している (Goodyear, A, 2017)。さらに、指導モデルに基づく授業改善の実施は、先にスポーツ教育モデルに関する教師教育を施すというモデル作成者や大学の研究者からの支援を準備することで、効果的に影響を及ぼすと示されている (Fernandez-Rio, J, Menendez-Santurio, L, 2017)。一方で、Macphail, A, Deenihan, J (2017)によれば、研究者による支援があったとしても、革新的な授業改善に対する同僚の教師の肯定的な反応や理解が、スポーツ教育モデルの実現可能性やモデル活用者となる教師の主體的な成長に大きな影響を与えたと報告されている。

しかし、オリンピック教育に関してどのように研究者と学校現場の教師が連携して成果をあげた

のか明らかにされていない。そこで、教師と研究者が事前に1回1時間程度の打ち合わせを4回実施し、研究者が指導案や資料を作成し、教師が修正する連携関係を結べば学校現場の実態に応じてシーデントップのオリンピック教育を活用できるのではないかと仮説を設定した。

次にシーデントップのオリンピック教育の特徴は、祭典性を強調した生涯スポーツの振興にあるといえる<sup>1)</sup>。彼によれば「祭典性は参加者に意義深い経験を与え、児童が日常生活で運動やスポーツを行う可能性を増大させる」(Siedentop, D et al, 2011, pp.147-148)と述べられ、祭典性が生涯スポーツの振興に結びつくことを指摘している。彼のスポーツの本質に対する考えには、遊びが中核にあり、そして遊びの成立には非日常性と祭典性の要素を明確に位置づけて、誰もが楽しめるスポーツの強調がある。我が国では、スポーツの勝利至上主義による体罰や疎外の問題が浮上しており、その雰囲気からの脱却を図る体育として、祭典的な体育祭や誰もが楽しめる運動会といったクライマックスのイベントを設定することは大きな意義を持つだろう。

その他にも祭典性を強化させる方法として、オリンピック賛美歌をかけた開会式や選手宣誓をしたり、ナショナルチームを模倣したチームTシャツや旗や応援を創って用いたり、フェアプレイ賞や優秀審判賞や優秀スポーツ実況賞や優秀応援賞などといった様々な部門から評価されるトロフィーや賞状を準備したり、地域住民や保護者やアスリートや有名な指導者に見に来てもらったり、映像ハイライトやスポーツ記事を作成して上映や閲覧によって楽しんだりすることが事例に挙げられている (Siedentop, D et al, 2011, pp.150-153)。このような視点は、ナショナルチームの理解を深める社会科の学習であり、Tシャツを作るなどの家庭科の学習という統合教育の側面がある。もちろん、誰もが楽しめるスポーツ活動を展開するには、フェアプレイの具体的行動の明確化や自分達

に合ったスポーツ活動の展開も必要となる。

また、それはスポーツをするだけでなく、カメラマン、実況アナウンサー、データ分析係などのスポーツをみる学習や、大会運営係、審判係などの支える学習といった多様なスポーツとのかかわり方を深めたり、勝利至上主義の志向の減少を図る価値教育を促進し、多様なスポーツ参加の価値共有ができる。当然このような単元を計画する場合、これまでの1単元6時間ほどでおさまる授業計画でなく10時間以上の長い単元時間と幅広い学習内容を設定する面倒な負担を引き起こす側面もある。しかし、実際にオリンピック教育を我が国に導入した場合に、どのような授業が展開可能となるのか、またその授業が生涯スポーツの振興に結びついていくのか明らかにされていない。そこで、本研究ではスポーツの価値教育と多様なスポーツ参加の学習は、子どもの勝利至上主義の志向性を減少させ、生涯スポーツの志向性を向上させるのではないかとという仮説を設定した。

以上のことから、本研究ではシーデントップのオリンピック教育という指導モデルを基盤にして、学校現場の教師の要望や目指す授業に応じて、研究者が授業改善の支援をして現場に寄り添う形で進み、次の2点を具体的な研究の問題として設定した。(1) 教師と研究者が事前に1回1時間程度の打ち合わせを4回実施し、研究者が指導案や資料を作成し、教師が修正する連携関係を結べば学校現場の実態に応じてシーデントップのオリンピック教育を活用できるのではないかとという仮説を設定し、この点に関する連携関係の過程と結果はどのようなものであったか検討する。(2) スポーツの価値教育と多様なスポーツ参加の学習は、子どもの勝利至上主義の志向性を減少させ、生涯スポーツの志向性を向上させるという仮説を設定し、これに関する学習内容の過程と結果はどのようなものであったか検討する。

### Ⅲ 研究の方法

#### 1. 本研究と学校現場の教師との関係及び参加者の文脈

本研究者とA教師は連携して、A教師が務める小学校6年生の学年全クラスとなる3クラス合同で3学期末にオリンピック教育を展開することになった。その背景には、まず本研究者とA教師は同じ大学の同期であり顔見知り程度の中であり、A教師と2015年9月頃にバレーボールの研究授業において共同研究する形で再会した。そのような経緯の中で、A教師には活発な授業研究によって授業力の向上を図りたいという意欲と、毎年行われている6年生の学年合同のスポーツ大会をもっと面白く意義深いものにしたいこと、東京都が推進するオリンピック教育を実施しなければならない状況であることが明らかになった<sup>2)</sup>。また、A教師によるとこの6年生のスポーツ活動の様子に関して、子ども達は勝ち負けにこだわり過ぎて些細なことで口論が起きたり、ミスプレーを非難することや技能下位の児童が楽しめなかったりする問題を有していると懸念されていた。

そこで、本研究者はこれまで研究したことや協力できることについての体育科教育学の情報概要を提供し、その中から合意できたものがシーデントップのオリンピック教育の活用へと至った。そして、スポーツ教育の中核やオリンピック教育の特徴について協議し、主にスポーツの価値教育と多様なスポーツ参加の学習に焦点をあてることとなった。なお、本研究者はシーデントップの体育論に関して論文を3編執筆しており、一定の理解を深めている。

本単元に関する打ち合わせと授業日程は、以下の表1の通りである。このようにスポーツ教育モデルに関する学校現場の教師の理解は、4回の事前打ち合わせの中で理解を深めていくこととなった。基本的には、学校現場の実態を受けとめて、その改善に向けた有益な情報をスポーツ教育モデ

表1 本研究者と教師の打ち合わせに関して

打ち合わせ回数と日付	打ち合わせ内容と時間	打ち合わせ以降の研究者の動き
1回目 2016年9月24日	3学期でのオリンピック教育実施の決定。 ：本研究者とA教師と大学院生で食事を交えながらの協議。	大学院生の授業研究の打ち上げと再会を祝しての食事会。
2回目 2017年1月6日	食事を交えながらオリンピック教育と学校の実態の理解。次回までに単元案提起 ：本研究者とA、B教師で協議。	実態把握と教師の授業計画の理解、研究者によるスポーツ教育の理解を実施。単元計画やスポーツ種目や中核となる学習内容の候補列挙。
3回目 2017年1月23日	18時からミーティング、イメージ共有する。単元計画と第1回目授業案の検討。 ：本研究者とA、B教師で協議。	具体的な単元計画やスポーツ種目や中核となる学習内容の決定。
4回目 2017年2月7日	第1回目の授業と全体計画の確認	1回目の授業と全体計画の資料準備
5回目 2017年2月8日	第1回目授業（本研究者が教室で体育に関する座学でのオリエンテーション）。 ：3クラス実施。	第1回目の授業の反省及び児童の感想を理解。第2～5回目の指導案及び配布資料、掲示物の作成。
6回目 2017年2月13日	第2回目以降の指導案と配布資料の検討。 ：本研究者とA、B、C教師で第2回目以降の授業案を協議。	第2回目以降のビデオカメラの配置や、本研究計画の見直し及び調整。 第2回目以降の授業準備や指導に対する確認及び具体的な指導対策。
7回目 2017年2月16日	第2回目授業（各クラス別行動）	2回目の反省と3回目の授業準備
8回目 2017年2月22日	第3回目授業の事前確認 ：本研究者とB、C教師で協議。	A教師が交通事故。本研究者がAクラスへ介入するように指導案修正。
9回目 2017年2月24日	第3回目授業（各クラス別行動）	3回目の反省と4回目の授業準備
10回目 2017年3月1日	第4回目授業の事前確認（B教師のみ）	
11回目 2017年3月3日	第4回目授業	4回目の反省と5、6回目の授業準備
12回目 2017年3月5日	第5、6回目授業の事前確認	
13回目 2017年3月8日	〇〇オリンピック大会	〇〇オリンピック大会と単元の反省
14回目 2017年3月14日	表彰式	インタビューガイドの作成・準備
15回目 2017年3月20日	B、C教師へのインタビュー	
16回目 2017年3月22日	A教師へのインタビューとお見舞い	

ルの中から少しずつ提起する形でスポーツ教育モデルに関する教師教育を実施した。

## 2. データの収集と分析

本研究の調査対象者は、東京都世田谷区の某小学校6年生3クラスの生徒106名、担任3名（A教師31歳、B教師27歳、C教師52歳）と1人のアクションリサーチャー（本研究者31歳）となる。授業期間は2017年2月8日から3月12日までの6時間の単元となった。データの収集方法は、打ち合わせ時と授業時の記録を残すビデオカメラ

による映像とインタビュー、研究者によるフィールドノート、授業で用いられたアンケートの記述内容となった。インタビューや記述内容などは、筆頭著者によって逐語記録した。逐語記録において人名や学校名はすべて匿名化し、個人情報の保護に配慮した。データ収集に際した倫理的配慮として、本研究者がビデオカメラによる撮影を事前に、本研究の趣旨、個人情報の保護、録音の許可、インタビューや撮影中止の権利、研究協力取り止めの権利について記述した研究倫理承諾書を提示して読み上げ、調査協力者から同意を得た。

データは26本のビデオ録画、21回のインタビュー、16枚のフィールドノート、721の生徒の毎回の授業アンケートの記述文から収集された。データは、研究設問の鍵となる1)研究者と教師の連携過程とその効果は、授業改善に向けてどうであったか、2)スポーツの価値教育、多様なスポーツ参加を促進する役割学習はどのような過程と結果を生み出したか、という側面から質的内容分析される。その際のコーディングに関しては、ブルームの教育目標分類 (Bloom, B et al, 1997; 梶田, 1983) に基づき、認知的領域、情意的領域、精神運動的領域に分けてさらに具体的な分類指標に従って実施された (表2)。

質的内容分析の具体的な方法については、鈴木ら (2017) の先行研究に従い、インタビューなどで録音した内容を逐語録にまとめ、逐語録から対象者の言葉の意味を変えることなく、要約文を作成した。要約文からコードにしたあと、コードの持つ意味を同じ内容ごとに分類し、サブカテゴリー化した。さらにサブカテゴリーの抽象度を高めることでカテゴリーを作成した。本研究では、質的内容分析を行うにあたり、データの信頼性と妥当性を高めるために、体育科教育学の質的内容分析に精通した研究者1名と体育哲学に関するグラウンデッドセオリーに精通した研究者1名によって分析の一連の作業と解釈を実施した。最後

表2 ブルームの教育目標分類に基づく内容分析の指標

認知的領域			精神運動的領域	
知識	具体的知識	用語の知識	模倣	衝動的模範
		具体的事実の知識		反復模範
	具体的方法手段知識	慣例的方法知識	操作	指示に従う
		傾向・手続き知識		選択 (焦点化)
		分類や範疇的知識		固定化
		規準的知識	精確	再生産
		方法論的知識		統制
	概括・抽象的知識	原理・概括的知識	分節化	系列
		理論や構造的知識		調和
	理解	翻訳 (言い換え)		自然化
解釈 (内部関連把握)		習慣化		
外挿 (延長・推量)				
応用			情意的領域	
分析	要素の分析		受容、注意	現象や刺激の意識
	関係の分解			進んで受容
	組織・原理の分析		統制的、選択的注意	反応
独特な伝達内容作成		積極的反応		
		満足して反応		
統合 (拡散的思考)	計画作成・手続提案		価値づけ	価値の受容
	抽象的関係の抽出 (データから仮説立案)			価値の選択
				価値を身につける
評価	内的証拠による判断		価値の組織化	価値の概念化
	外的規準による判断			価値体系の組織化
			価値組織による 性格化	一般化された態度
				人格化

に、A 教師にデータ結果を提示して修正検討するバックトライアングレーションを実施することにした。

## IV 結 果

### 1. 研究者と教師の連携過程とその効果

本項では、教師と研究者が事前に1回1時間程度の打ち合わせを4回実施し、研究者が指導案や資料を作成し、教師が修正する連携関係を結べば学校現場の実態に応じてシーデントップのオリンピック教育を活用できるのではないかということに関する連携過程と結果を検討する。

教師と研究者の連携関係は、研究者による学校現場の実態理解と教師の負担軽減に努めた過程があり、教師と柔軟に良好な関係を築き、オリンピック教育を実態に応じた活用があったといえる。詳細な内容や根拠について以下に述べていくことにする。

まず、A 教師と本研究者の連携過程について、研究方法でも述べたように本研究者はA 教師の話の聞き、話の論点について質問や情報提供し、A 教師が再度質問したり意見したりして指導目標や内容を決定した。次に、その単元計画や毎時間の指導細案を本研究者が作成し、A 教師が修正し採用していくものであった。教師と研究者の関係性について、単元計画作成時のA 教師との協議中の3回目の発話回数から検討すると、そこでの本研究者の発話回数は126回、A 教師の発話回数は154回と同程度であり、お互いに疑問を投げかけたりして対等に意見交換したりしていたことが分かる。ただし、研究者が学校現場の状況理解を深めるために質問をA 教師より多く実施したため、A 教師の発言回数の多い結果になったといえよう。また、研究者は当該の学校や教師や子どもの実態を把握しようと2回目の協議の際には、アンケートを用いていた。このように研究者は学校現場の実態理解に努める連携関係があった。

次に、教師の負担軽減と柔軟に対応する良好な関係について説明する。学校現場ではよく予想外の出来事が起き、本研究中も同様であった。研究授業が2回の実践を終えた2017年2月22日、A 教師は交通事故に遭った。3月末まで病院での生活となったため、本研究者がA 教師の代わりにクラスへ入って体育指導をする柔軟な対応を実施した。また小学校6年生全体の3クラス合同体育の開催にあたり各教師に対して理解を深めてもらうため、いつでもどこでも学習できるように分かりやすい資料と詳細な資料を混ぜた単元計画と毎時間の指導細案とワークシート等の資料を作成し、2回目の授業前にはすべての時間の指導細案とワークシートを提供し、各教師にはその他の学校業務に差支えないように研究授業へ取り組めるように打ち合わせ時間を多く設けず教師の負担軽減に努めた。それでも打ち合わせが必要な場合もあり、3回目の授業前にはそれぞれの異なる役割毎の記録や説明などの資料を配布して解説や質疑応答をA、B、C 教師と交えて行うことで、見通しもった指導ができるように配慮した。こうした指導資料の合計は、3クラス分を合計すると指導案やワークシートや資料及び掲示物も含めて43枚となった。その単元計画の概要は、4回目の打ち合わせ時に提示することができ、それが図1、2となる。

それでも、単元経過に伴って、3時間目はその前の時間の全体集会在が長引き開始時間が大幅に遅れたこともあって、お手玉カーリングとトスキャッチバレーボールに関するリハーサルは実施できたが、ごちゃまぜサッカーに関するリハーサルは実施できず、学校現場の教師と協議して子どもの実態に応じて別に時間を設定することになった。また、4時間目の後に各教師は自ら積極的に時間を設けて応援幕や選手宣誓の内容準備、その他役割の確認などといったスポーツ大会の準備を子どもと実施し、放課後など子どもが積極的に練習したりする学習機会をつくり、このオリンピッ

ク教育の学習に対して柔軟に配慮する支持行動を行っていた。その代わりに、学習進度や子どもの役割学習を円滑にするために、玉入れやビデオハイライトおよび交流会は実施しない変更を教師と協議の上、行った。したがって、当初は7回の授業を予定していたが結果として6回の授業へ変更となった<sup>3)</sup>。

単元終了後の教師へのインタビューでは、A教師は「連携過程は良かった」、B教師は「途中でアクシデントがあったけどもよくできたのでは」、C教師は「実は忙しくて資料も全部に目を通さなかったのですが、リハーサルや簡易な指導案があったのと、授業後もほんの少しだったけども、(本研究者と)意見交換できて良かった」そして、B、C教師ともに「子どもが喧嘩もなく喜んでやっていた」と述べられた好印象の評価があった。ま

た、本研究者もフィールドノートには「指導案を提出し、学校現場の教師に修正してもらうことで、学校現場の実態を踏まえたものに改善され、スポーツ教育モデルやオリンピック教育について学校現場の教師が少しずつ理解を深めていった」と記されていた。このように研究者は教師の負担軽減だけでなく、柔軟に良好な関係を築いていたといえよう。

なお、本単元で計画し、実施したことがわかるシーデントップのスポーツ教育モデルおよびオリンピック教育のチェックリストは表3の通りとなった。このチェックリストは、Hastie,Pら(2013)のスポーツ教育モデルのチェックリストを参考にしつつ、本単元で取り組んだオリンピック教育に関しても考慮して修正したものである。表3の通りオリンピック教育は、授業前の4回の打ち合わ

表3 本単元におけるスポーツ教育とオリンピック教育の実施チェックリスト

指導上のチェックリスト (スポーツ教育)		計画した	実行した
1	生徒のグループはデザインされたホームエリアに行きグループでウォーミングアップを始める	×	×
2	生徒は教師の直接指導のもとでクラス全体でウォームアップする	○	○
3	生徒はベアリーダーの直接指導のもとでグループで一緒に練習する	×	×
4	生徒は教師の直接指導のもとで小グループか個人的に練習する	○	○
5	生徒は授業の間ずっと早期に識別されたグループで、異なる課題のままである	○	○
6	生徒は課題を交えて変化しやすい授業でいたるところでグループをつくる	×	×
7	パフォーマンス記録は生徒によって保持される	○	○
8	生徒はグループの中で特別な課題を行う	○	○
9	生徒のパフォーマンス得点は公式で公共のスコアシステムで数える	○	×
10	生徒のパフォーマンス得点はプライベート(体育授業以外の時間)でも記録される	×	○

指導上のチェックリスト (オリンピック教育)		計画した	実行した	
祭典性、スポーツへの多様な役割学習	1	クライマックスのイベント、選手宣誓、表彰式	○	○
	2	チーム応援旗、応援歌、応援グッズ作成	○	○
	3	学年や教員を巻き込む大会運営	○	×
	4	役割学習(カメラマン、実況係、監督データ分析係、大会運営係)	○	○
	5	役割学習の内容や授業の流れがわかる資料配布	○	○
フェアプレイ教育	6	スポーツの価値理解についての教室での学習	○	○
	7	フェアプレイの具体的内容の説明及び掲示	○	○



単位時間の指導計画（体育）研究授業用

No.1

学 校 名	世田谷区立 ■■■ 小学校		
指導教員名	■■■	授 業 者 名	6年生の担任の先生方と■■■
日 時	平成 29 年 2 月 8 日 水曜日 ( 5 ) 時間目	(単元指導計画における本時の割り当て) ■■■	
学 年 ・ 組	第 6 学 年 1 ・ 2 ・ 3 組	在籍者数	29 名 ※ 3 クラス
		出席者数	名 (男子 名 ・ 女子 名)
		見学	名 ・ 欠席 名
場 所	多目的室	使用する用具等 (個数) プロジェクター、学習資料	
生徒の実態	ソフトバレーは5年生で、玉入れは毎年の運動会で、サッカーは、この冬に既習したものである。女子はソフトバレー、男子はサッカーを好む状況がある。スポーツ大会を支える学習に関する興味は未発達の状態である。		
単 元 名	<b>東京オリンピック・パラリンピック教育企画</b> <b>■■■小学校6年生主催 2017 みんなの■■■リンピック大会第1回大会をつくろう</b>		
運動の特性	<p>「いつでも、どこでも、誰とでも」できるみんなのスポーツ活動として以下の3点を取り上げた。</p> <p>①「ごちゃまぜサッカー」は、視野の確保と状況判断を重視したものであり、サポート行動や組織的な守備を習得するによって攻防を楽しむ運動である。</p> <p>②「お手玉カーリング」は、運動が苦手な生徒でも楽しめるものであり、投動作と調整力を駆使して戦略的な攻防を楽しむ運動である。</p> <p>③「キャッチソフトバレー」は、連携プレーによる攻撃やそれに対応する守備を習得することによって、楽しさに触れる運動である。</p> <p>なお、それぞれのスポーツを支える運営・審判係りや監督データ分析係りや広報マスコミ係りの役割学習は、子どもたちにとっても初めての学習となる。</p>		
単元の目標	<p>(特別活動の学校行事の目標を参考) 学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。 ↓ (総合的な学習の時間の目標を参考)</p> <p>自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること</p> <p>(道徳の目標を参考) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。</p> <p>(体育の目標を参考) 生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる。子どもが主体となって、とくに運動が苦手な子どもが運動を楽しみ、ほかの子どもは、みる・支えるスポーツの魅力を味わうこと。</p>		

1

図1 本単元の目標等

時間	ねらい・学習活動	評価の 観点	評価方法	
<p>ねらい① 子どもが主体的にスポーツを支える役割学習と誰もが楽しめるスポーツ大会をつくる趣旨や計画や内容の概要を理解して学習意欲を高める。</p>				
はじめ	1	<p>活動Ⅰ スポーツ大会の文化的機能と支えるスポーツの理解 今回提案される3つのスポーツの理解 自分たちの現状や実感知識を理解して、役割や種目を決定する。</p> <p>活動Ⅱ <u>宿題)この学習に対する疑問や改善点をあげる</u> <u>各チームでよりよい支えるスポーツの役割内容を調べ練習すること</u></p>		
	<p>ねらい② 児童が主体的にスポーツ大会を円滑に楽しく運営できるように指導すること 2時間目は、担当種目の役割について精通して熟練すること 3時間目は、学年を通してリハーサルとして本番の流れをつかんでおくこと 4時間目は、担当種目以外の2種目について確認して改善を図ること</p>			
なか	2	<p>活動Ⅰ 1組は( )のスポーツ種目に熟練 2組は( )のスポーツ種目に熟練 3組は( )のスポーツ種目に熟練 <u>宿題)リハーサル進行の理解</u> 担当となるスポーツ種目のルール理解と役割学習の重視</p>		
	3	<p>☆ロリハーサル 学年全体で短縮時間で本番と同じ流れを実施 1、オープニングセレモニー 3、トスカッチソフトバレー 2、ごちゃまぜサッカー 4、お手玉カーリング 5玉入れ <u>宿題)各チームでプレイヤーとして実施する種目について自主練習する。</u></p>		
4	<p>活動Ⅱ 2時間目で担当しなかった種目についての確認・指導 クラス内でそれぞれの種目の戦い方と待機児童対応策の検討 みるスポーツとしてのマナーや魅力に触れさせる <u>宿題)みる人にとって楽しいスポーツとは何か考え改善する</u> <u>オープニングセレモニーや交流会についての検討(委員)</u></p>			
<p>ねらい③ 支えるスポーツの魅力を実感すること 今の自分は、いろんな人々に支えられて成り立っていることを理解する</p>				
まとめ	5	<p>活動Ⅰ スポーツ大会 1、オープニングセレモニー 3、トスカッチソフトバレー 2、ごちゃまぜサッカー 4、お手玉カーリング 5、玉入れ</p>		
	6	<p>※何も無い時に見るスポーツとして楽しめるように大会運営すること 活動Ⅱ ビデオハイライトと交流会と表彰式 スポーツ大会を振り返り、お互いの健闘を称え合い、評価し合う 係り毎の交流をしたり、先生からの評価も行う。</p>		
7	<p>1、ハイライトパーティー 3、表彰状 2、各クラスの評価・発表会 4、教師からの評価</p>			

図2 単元計画の概要

せの中で共通理解を図り、初めてシーデントップのオリンピック教育を実施する中では、高い水準で計画実施することができたといえよう。

以上のことから、教師と研究者の連携関係には、研究者は学校現場の実態理解と教師の負担軽減に努めている過程があり、教師と柔軟で良好な関係を築き、オリンピック教育を実態に応じて活用できた結果があったといえる。

## 2. スポーツの価値教育と多様なスポーツ参加を促進する役割学習に関する過程と結果

ここでは、スポーツの価値教育と多様なスポーツ参加を促進する役割学習に関する過程と結果について検討する。スポーツの価値教育と多様なスポーツ参加を促進する役割学習に関する過程は、1時間目に誰もが楽しめるスポーツ活動の実現に対する価値教育を施し、2時間目からクラス毎に1つのスポーツ活動を支える運営や審判について習熟し、3時間目にスポーツ大会を子どもが主体的に運営したり参加できるようにリハーサルを行い、4時間目にみるスポーツの魅力やマナーについての理解を実践的に活用し、5、6時間目にクラス対抗の祭典的なスポーツ大会を実施して学習成果の発表となった。その結果として、子どもの過度な勝利至上主義の志向性を減少させ、生涯スポーツの志向性を向上させたといえよう。以下で、その点を具体的に述べていく。

1時間目に、3クラス合同で多目的教室においてスポーツの価値教育に関する授業を本研究者が授業展開した。1時間目の授業目標は、3つあった。1つ目はスポーツ大会の文化的機能と支えるスポーツの理解であった。2つ目は、本単元で取り扱う3つのスポーツ活動への理解であった。3つ目は、自分たちのスポーツに対する価値観の問題を理解して役割や種目を決定することであった。

しかし、実際は3クラス合同で集まって着席するとともに、配布物の確認の時間で23分の時間を費やすこととなった。本研究者は授業開始より

23分経過してから自己紹介し、スポーツに対する見方・考え方などを含めた学習内容のパワーポイントの資料や動画を巨大スクリーンに写し、子どもにはワークシートを活用しながら対話的に授業を展開した。

まずは、ワークシートに「スポーツの魅力といえば何ですか」「スポーツや体育の嫌なところや問題点はありますか。それは何ですか」「自分にとってスポーツはどのような影響を与えていますか」「大人になった時、自分はスポーツとどのように関わりたいですか」という発問に対して自由記述する時間を8分程設けた。その時の子どもの記入内容は、次の表4の通りとなった。表4は、6年2組38名の中で記入された10名の記述を内容分析してコード化し、4つのサブカテゴリーに整理し、2つに分類された。このように、A教師が事前打ち合わせ時に述べていたように、子ども自身でもスポーツに対する弊害や嫌悪感が受け止められていた。

このワークシートの記入後、2015年9月19日にラグビー日本代表が南アフリカに勝利する選手や観客や監督の映像、サッカーの実況をする松木安太郎さんの横顔、審判の姿、第51回のアメリカのスーパーボウルのハーフタイムショーで現れるレディーガガ、体育祭で懸命にソーラン節を踊る中学生の様子、一所懸命に2人3脚の競争をしたり、運動を楽しむ小さな子どもの笑顔、老若男女が混ざって楽しむ玉入れの様子、東京オリンピックの開催招致をPRする映像を見せた。これらの映像から、スポーツの魅力には、誰もが幸せになれること、多様な関わり方でみんなと一緒に楽しめること、一人ひとりに応じた課題を達成できる経験が味わえると紹介した。これらの事例を踏まえて、運動が上手い児童によるスポーツの楽しさの独占を禁止し、努力している人のミスプレーをバカにしないこと、勝利のみに価値があるのではなく、最善を尽くしたフェアプレイやみんなが楽しめるスポーツに価値があること、そんな

表4 スポーツや体育の嫌なところや問題点に対する分析結果（6年2組38名の記入数10名）

コード 10	サブカテゴリー4	カテゴリー2
何が何でも勝とうとして、ひどいことをする人がたまにいるところ。	勝利至上主義による弊害	スポーツに関する負の具体的事実の知識（認知1）
勝ち負けにこだわり過ぎてしまい、辛い思いをする人がいること。		
体力の差が見えたり得意不得意が生じる。	技能格差による面白みのなさの弊害	
得意な人、上手な人に分かれる。		
生まれつき持っている技能だから差がつく点。		
ルールが細かい。勝敗をつける。	複雑なルールへの嫌悪感	チームに迷惑をかける嫌悪感と劣等感の反応（情意1）
ルールが複雑なものもある。怪我をする。		
うまくいかずにボロ負け、足を引っ張る、全然できなくていやになる。運動が基本嫌いなど。	運動に対する劣等感の経験	
跳び箱で横を跳ばしてくれない。		
疲れる。		

スポーツが生涯スポーツとして実施することの大切さについて訴えた。このような映像によるスポーツへの見方・考え方を深める紹介については、約7分時間を要した。

その後、本単元の主な目標が3つあることを紹介した。1つ目は、みる・支えるスポーツの魅力を味わい学習していくこと、2つ目はフェアプレイを心がけ平和の祭典として楽しく学習すること、3つ目は自ら進んで考えたり挑戦したりして最善を尽くすことであった。そして、中核となる学習内容も3つあることを紹介した。1つ目は1クラス1種目担当の審判と運営係、2つ目は広報メディア係（実況アナウンサー、カメラ係）、3つ目は選手と監督データ分析・医療トレーナー係である。次に、本単元の授業計画と実施するスポーツ種目の内容とルールの概要を紹介した。なお、実施するスポーツ種目は3つとなる。1つ目は4対4のトスのみキャッチありのバレーボールである。2つ目はお手玉カーリングといって7m離れた先に3重丸の円があり、その中心の円にお手玉が入ると100点となるゲームである。1チーム5人であり、1人が投手で、2人がカーリングのスウィーピング（ブラシで床磨きのような動作のこと）のような役割となる。そこでのスウィーピングの役割を

担う選手は、新聞紙の坂道を作って投手からのボールをうまく障害物を越えていくように調整して連携することとなる。残る2人は順番に投球する投手とした。このように1チーム5人で、5対5対5の3チーム合同で行うゲームである（図3）。3つ目も同様に、5対5対5の3チーム合同で行うもので、ごちゃ混ぜサッカーといって、40m<sup>2</sup>の中で1.5m間のカラーコーンによる一組のゴールラインを3つ設定し、一組のカラーコーンゴールラインを経由したパス交換が味方同士でできると1点となるゲームで競い合うものとした（図4）。

これらの本単元で取り扱う役割学習と教材の紹介を終えて、各クラスの運営担当種目の発表と各クラス内での役割決定に関する協議会を実施すると定刻となった。この1時間目の授業を終えての子どもの感想は、表5の通りとなった。このように、複雑で大変なスポーツに対する具体的事実の知識を形成しつつも、スポーツの多様な楽しさや、得た知識を大会で応用したい意欲の増加、みんなで楽しむことへの反応と価値づけという共通理解や情意的反応がみられた。

以上のことから、1時間目ではスポーツに対する多様な楽しみ方とみんなが支えるスポーツに対する学習と、誰もが楽しめるスポーツとしての価値

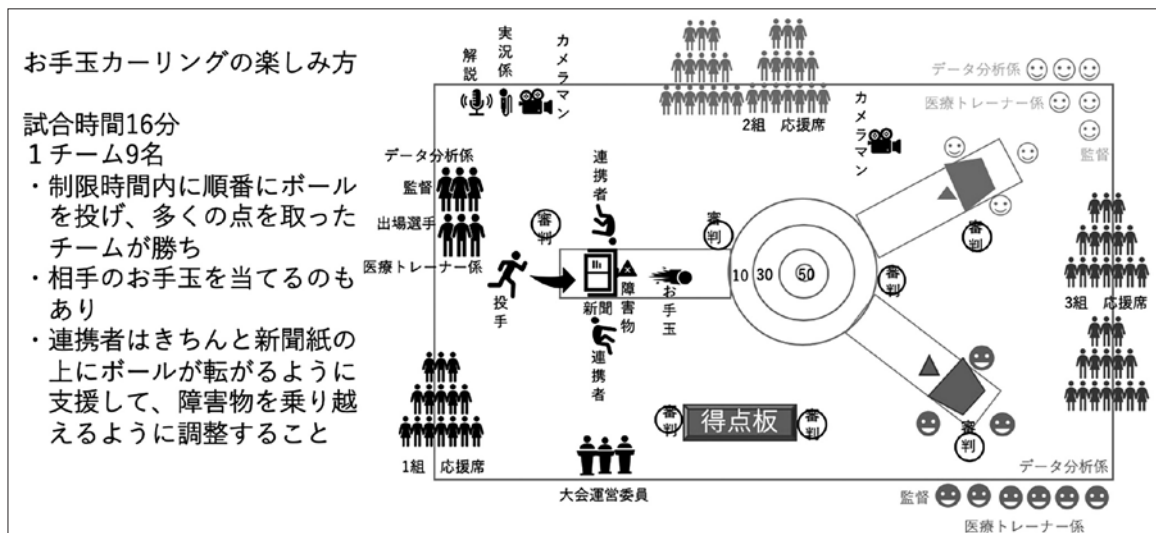


図3 お手玉カーリング

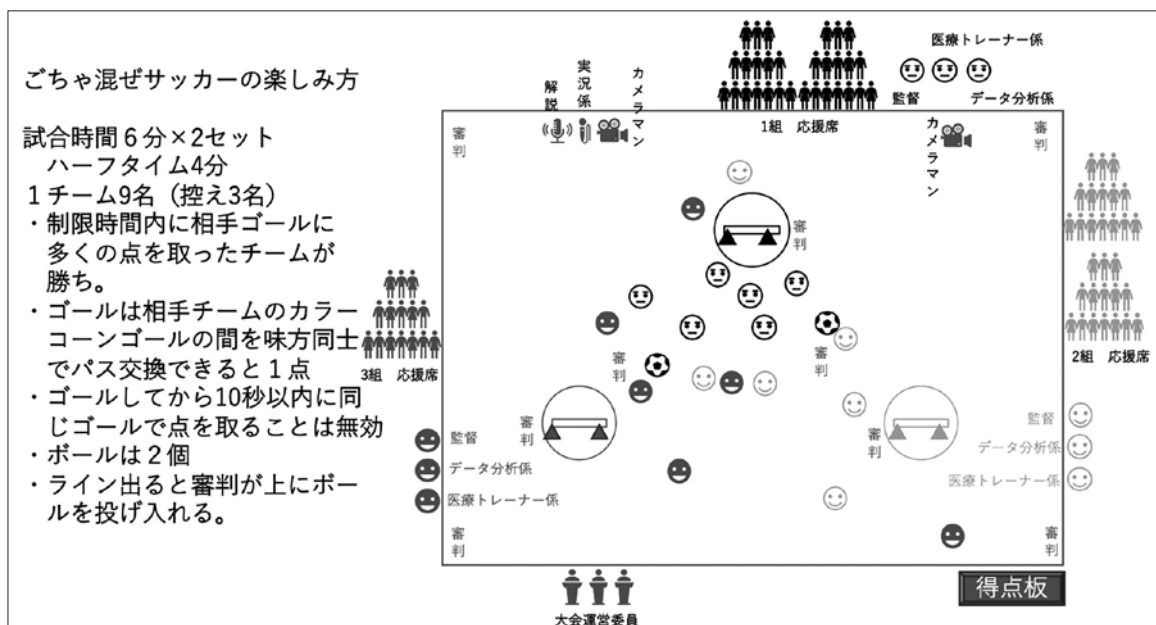


図4 ごちゃ混ぜサッカー

値教育を実施し、スポーツ実施の際の態度変容を促進する機会を提供し、生涯スポーツへの志向性の向上に貢献したといえよう。

2時間目は、1組がごちゃ混ぜサッカー、2組がお手玉カーリング、3組がトスカッチバレーと、それぞれの運営担当となるスポーツ種目について、ルール理解だけでなく、運営方法や審判の方法についても習熟し理解を深めることを目的とした授業を実施した。3時間目はリハーサルとして、学年全体で短縮時間の中、本番と同じ流れを

実施した。この3時間目の授業について期間記録を実施すると以下のようなになった。17分10秒マネジメント時間。6分10秒インストラクション時間、運動学習場面が9分50秒、認知学習場面が3分50秒で合計38分の体育の授業時間の配分となった。中心となってリハーサルを進めた2組のB教師の発言回数は84回であった。その際の言語内容は、移動場所や次のすべき行動に関する指示的内容が43回、発問が9回、それぞれのゲームパフォーマンスに関する内容が8回、社

会的な態度に関する内容が5回、思考・判断に関する内容が5回、励ましが3回、その他が9回となった。このように、みる・支えるスポーツの学習に関わると、大会運営に関するマネジメント時間で指導内容が多い特徴を有していることが分かった。4時間目は、運営担当でないスポーツ種目についての理解を深めると共に、応援やデータ分析などのみるスポーツに対する学習を展開した。5、6時間目は大会当日となった。そこでの106

名の子どもの自由感想の記述内容は78名のみ回収することができ、その内容は次の表6の通りである。コードは78コード、サブカテゴリーは29、カテゴリーは12に整理された。

このように、本単元の学習を終えた子どもの実感には、協力に対する理解やゲームパフォーマンスの精確という学習が10コード見受けられた。比較的多かった学習は情意的領域であり、楽しく肯定的で協力や努力に対する積極的の反応や、楽し

表5 「1時間目の授業を受けての自由感想内容」6年2組の記入数17名の内容分析結果

コード17	サブカテゴリー10	カテゴリー4
スポーツは複雑だと思った。	複雑なスポーツへの知識	複雑で大変なスポーツに対する具体的事実の知識 (認知1)
自分たちでできるのは嬉しいが、ルールを覚えないといけないから大変だ。	大変というスポーツへの知識	
スポーツは様々な立場の人が関わって成り立つことを実感した。	スポーツは多様な支えで成り立ち楽しむものという解釈	スポーツの多様な楽しさへの理解 (認知2)
スポーツは体を動かすだけでなく、楽しむものだとすることを学んだ。		
スポーツはできなかつたり失敗しても大丈夫だし、努力していれば自然と楽しく感じられる事が分かった。	失敗しても見ても楽しいというスポーツへの解釈	
スポーツは体育の延長だが、そのスポーツを見てもプレイしても楽しめるものだとわかった。	大会への積極的の増加	得た知識を大会で応用したい意欲の増加の反応 (情意1)
〇〇オリンピックの仕組み計画についてわかり興味が湧きました。		
スポーツの魅力について知れた。誰もが幸せになるのがスポーツだから、一緒に〇〇オリンピックを頑張りたいです。		
私は、〇〇オリンピック委員会なので積極的にやろうと思いました。	スポーツの魅力に対する積極的の反応	みんなで楽しむことへの反応と価値づけ (情意2)
魅力に対してまた考えて見たいです。		
スポーツは勉強と全く違う。スポーツはみんなで盛り上がる。	みんなで盛り上がる肯定的反応	
スポーツは周りの人も楽しくなるので盛り上げていけたらいいなと思いました。	みんなが楽しめる価値の積極的の反応	
スポーツ大会で全員が楽しめる会にしたいと思った。		
スポーツはあらためてとても良いと思った。みんなが楽しめる。	誰でも遊びたい価値の選択	
みんなが楽しめる(見ている人も)。体を鍛えられる。だいたいルールが簡単。		
スポーツは誰でもできるので、これをきっかけに普段遊ばない子も遊びたいです。	責任を持って楽しみたい価値の選択	
今日はスポーツ本来の魅力を学ぶとともに、スポーツ大会への楽しみが湧いてきた。それぞれに審判などの役割もあるため、責任を持って本来の魅力を楽しみたい。		

表6 6時間目終了後の子どもの自由記述による授業感想の内容分析結果

協力することの楽しさを知った。	協力する楽しさの知識獲得	協力に対する理解 (認知1)
みんなで応援して協力することの楽しさを知る事ができました。		
今日の〇〇オリンピックの大会授業を受けて、友達とのチームワークは大切なんだなと思いました。		
みんなで協力しないとアカリンピックはできないし、クラスのためにも必要なのでみんなの力がすごく理解できた。	チームワークの大切さの認識	
この学習で自分で行動する大切さを学びました。	主体的行動の大切さの理解 (認知1)	
僕はキャッチバレーに出ました。初めはパスが繋がらなかったけど練習を重ねるうちに繋がるようになり良かったです。	上達した技能	ゲームパフォーマンスの精確化 (精神運動的領域1)
キャッチは練習以上にうまくできたのでよかったです。	練習成果の発揮への満足	
キャッチバレーボールでは、放課後の練習の成果が出ました。		
練習の成果が出たと思います。		
今まで練習していた成果が出たのでよかったです。		
楽しかった。	楽しさの実感	楽しく肯定的で協力や努力に対する積極的反応 (情意1)
楽しかった。		
すごく楽しかったです。		
なかなか楽しかった。		
色々なチームとバレーをして楽しかった。		
最後の結果が平和的で良かったです。	結果に対する肯定的実感	
全ての組が同点で引き分けだったのが良かったです。		
みんなで徐々に白熱できた。		
声出しを頑張った。	自己への努力の実感	
一所懸命戦った。	協力できた実感	
みんなで協力できた。		
いつもの体育の授業よりも協力できていた。		
〇〇オリンピックでは全員が協力して試合に取り組む事ができたと思います。		
みんな協力していい大会ができた。	協力による好影響の実感	協力できた価値づけ (情意2)
協力でき絆が深まったのが感じられました。	みんなで楽しめた実感	
仲間と協力でき、チーム1組でしっかり団結でき、楽しめました。		
運動を楽しく協力してできるようになって良かった。		
また、全員で楽しむ事ができたと思います。		
みんなで楽しく〇〇オリンピックができた。		
思ったより盛り上がったのでびっくりした。		盛り上がった実感
みんなで盛り上がって嬉しかった。		
6年だけで楽しい〇〇オリンピックにできたと思った。		

とても楽しい思い出となりました。	良い思い出の大会 となった実感	記憶に残る大会としての 価値づけ (情意3)
卒業までのいい思い出になりました。		
とても楽しく盛り上がった最高の大会になったので良かったです。		
自分も勝利のために全力で頑張れたから、頑張ってやった かいたがあったと思った。	みんなで頑張った実感	みんなで頑張った 価値の受容 (情意4)
他のクラスもみんな今日に向けて一所懸命やっていた良 かったです。		
みんなで協力する大切さを学ぶ事ができて良かった。	みんなで協力する 大切さの実感	
今回〇〇オリンピックを開催したことで勝利に向かって全力 で頑張ること、仲間と協力することの大切さを学ぶことが でき良かったです。		
カーリングではボールが浮いてしまい10点に入ったのが 1点になった事が残念だったが、みんなで楽しくできたと思 う。	条件付きの楽しさの実感	楽しさや好結果や最善を 尽くした価値の選択 (情意5)
自分は失敗してしまったが他の人を見てみて面白かった です。		
バレーボールの棒の片付け中に事故が起こり怪我をしたの で出られなかったが、成功して良かった。	限定的な好結果の実感	
悔しいこともあったけれど、みんなで楽しく行うこともで き、さらにしっかり応援もできたので良かったです。		
私は骨折をしていてサッカーは出場できなかったけど、声 を出せたので良かった。	条件付きの最善を尽くした 実感	
選手として参加した時は点数は入れられなかったけど相手 のボールにぶつかって相手チームに点数が入ることを妨げ て役割を果たせました。		
サッカーでは負けてしまいましたが、全力で試合に取り組 むことはできたと思います。		
チームワークはあまり良くなかったがそれぞれが点を入れ ようと頑張っていた。		
とても楽しく誰も愚痴を言っていなくて良かった。	文句が出ない変化の実感	フェアプレイの 価値を身につける (情意5)
普通だったら得点ごとに文句を言われるのに、誰からも文 句が出なかった上に歓声が上がったのが心に残りました。		
みんな公平に楽しく活動ができて良かったです。	フェアプレイの 価値の体現と認識	
今回の授業でフェアプレイを意識する事ができ、また友情 を深める事ができた良い授業となりました。		
自分たちで協力してフェアプレイをする事ができ、正々 堂々と戦う事ができて良かった。		
応援もしかりしました。	応援の充実感	見るスポーツの 価値を身につける (情意6)
楽しく応援できて良かったです。		
それにとっても楽しく試合をしたり応援もできました。	みんなで応援した 楽しさの実感	
楽しかった。みんなが応援してくれた。		
仲間を応援し楽しみながら取り組みました。		
たくさんの人と応援してスポーツ大会を行う事ができたの でとても良かったと思いました。		



<p>とってもスムーズに行き、片付けや準備もみんな積極的にやっていたと私は思います。</p> <p>トレーナーでは事前に決めていたストレッチをできたのでよかった。</p> <p>一人一人それぞれの仕事をしてきちんと一所懸命する事ができていました。</p> <p>また一人一人がしっかり輝けるようにできた。</p> <p>全員がしっかり自分の役割をやっていたのでスムーズに試合などができたと思います。</p>	役割の達成感	支えるスポーツの役割遂行の価値づけ (情意 7)
私も自分の仕事を最後までやりきる事ができていたと思いました。	最後まで果たした 役割の充実感	
自分の役割を全うし最善を尽くせました。	楽しく役割が果たされた 実感	
広報もしっかりできたのでみんなが楽しめたと思います。		
運営も選手としても楽しく授業ができた。		
今まで運営でも選手としてもたくさん練習していたためミスがなく楽しく活動できました。	みんなの役割遂行による 充実感	
他のクラスの係りの人がテキパキと前より積極的だったり、どのクラスも協力できていたと思いました。		
チームカラーを決めたり、応援歌を決めたりしてチームワークをより深いものにできたと感じた。		
また、自分の役割を成功させるために台本を作ったり、チームとして運営、競技を成功させるためにたくさん練習したりできた。		
スポーツ大会の練習で体力をあげるとともに、一人一人が役割を担う事で責任を感じ、全員が係の役割を果たせたと思います。		
僕はこのような大会でもものすごく盛り上がり、スポーツを通じて楽しく、色々と協力をして、人と人との関係を深められたので良かったです。理由は今日の大会でもものすごく盛り上がり、準備をする時に、協力したり、応援するときなどに関係をより綿密なものにできたからです。		
仲間との絆が深まったので卒業まで絆をもっと深めて頑張りたいです。	仲間との絆を深めたい意欲	スポーツやチームでの活動の価値への積極的組織化 (情意 8)
またなかなかできない学年でスポーツするという事ができて良かったと思いました。	スポーツを通じた 交流の良さの実感	
スポーツで他のクラスの人とも交流ができました。とても楽しかったのでまたやりたいです。	スポーツへの志向性の向上	
スポーツは様々な役割の人が集まってこそできるみんなが笑えるものだと思います。もっともっとスポーツに親しみたいです。		
もっとスポーツという課題に触れてみたい。		

さや好結果や最善を尽くした価値の選択を表す内容が13と8コードであり多かった。最も多くのコードが集まったカテゴリーには支えるスポーツ

の役割遂行の価値づけであり、15コードあった。これらの内容分析結果より、子どもの自由感想からみた本学習の成果には、認知的領域や精神運動

的領域よりも情意的領域に多くの変化をもたらしたものであった。情意的領域の内容に関しては、具体的に挙げると、スポーツの楽しさやスポーツ大会を誰もが楽しめるようにするための協力や役割遂行、フェアプレイや応援に対する良さを実感できるスポーツ体験を味わえるものであった。言い換えれば、多様なスポーツ参加を促進する役割学習や生涯スポーツへの志向性に貢献する学習が展開されたものであったともいえよう。

以上のことから、スポーツの価値教育は1時間目の教室における授業展開により、スポーツの本質や魅力を知ることによって子どものスポーツに対する過度な勝利至上主義の志向性を減少させて、多様な価値観を受け止め、2時間目の練習から6時間目の大会を通してスポーツ活動に対する多様な楽しみ方や誰もが楽しめるようなスポーツ活動へ自ら導いていく価値観を体現していくことが深められる学習展開であったといえる。次に、多様なスポーツ参加を促進する役割学習や生涯スポーツへの志向性の向上に関しては、運営係や応援やスポーツ実況やカメラマンやデータ分析係などのみる・支えるスポーツの多様な役割をグループ別に学習して遂行することができ一定の成果をあげたといえよう。また、生涯スポーツの志向性に関する言及として、もっとスポーツに触れたい、またやってみたいなどの感想が3コード生じる結果となった。

## V 結 論

本研究の目的は、(1) 教師と研究者が約1ヶ月前から1回1時間程度の打ち合わせを4回実施し、研究者が指導案や資料を作成し、教師が修正する連携関係を結べば学校現場の実態に応じてシーデントップのオリンピック教育を活用できるのかその連携関係の過程と結果の検討、(2) スポーツの価値教育と多様なスポーツ参加の学習は、子どもの勝利至上主義の志向性を減少させ、生涯スポー

ツの志向性を向上させるのかその学習過程と結果の検討であった。

本研究の結果、(1) 教師と研究者の連携関係には、研究者は学校現場の実態理解と教師の負担軽減に努めている過程があり、教師と柔軟で良好な関係を築き、オリンピック教育を実態に応じて活用できた結果があり、(2) スポーツの価値教育と多様なスポーツ参加を促進する役割学習に関する過程として、1時間目に誰もが楽しめるスポーツ活動の実現に対する価値教育を施し、2時間目からクラス毎に1つのスポーツ活動を支える運営や審判について習熟を深め、3時間目にスポーツ大会を子どもが主体的に運営したり参加できるようにリハーサルを行い、4時間目にみるスポーツの魅力やマナーについての理解を実践的に活用し、5、6時間目にクラス対抗の祭典的なスポーツ大会を実施して学習成果を発表する過程となった。その結果として、子どもの過度な勝利至上主義の志向性を減少させ、生涯スポーツの志向性を向上させたといえよう。

ただし、本研究は1事例の限定された証拠に基づいて導き出された結論であるため、今後はさらなる検証が求められる。

### 注釈及び引用参考文献一覧

- 1) シーデントップのオリンピック教育は、彼が提起するスポーツ教育の中に位置づき、国語や数学や社会や家庭などの教科と連携する統合教育の1つの方法として示されている。そしてオリビズムという人格的発達を中心目標としつつも平和の祭典と国際理解を促進しようとするものである。その理論的概念の詳細については、和田(2018)において述べられている。
- 2) 東京都のオリンピック教育は「オリンピック・パラリンピックの精神」と、オリンピック・ムーブメントの3つの柱「スポーツ」、「文化」、「環境」を合わせた4つのテーマを設定し、「学ぶ(知る)」「観る」「する(体験・交流)」「支える」の4つのアクションを組み合わせた多彩な取組を行う。この取り組みとシーデントップのオリンピック教育は深い関連があると3人の教師から合意を得て東京都のオリン

- ピック教育の一環として本実践を位置づけて行なった。
- 3) 図1の単元の目標で示されているように、本研究で行ったオリンピック教育の実践は、特別活動、総合的な学習の時間、道徳、体育の時間を含めた統合教育としての実践のため、体育のみへの単元配当時間の負担とはならず、本小学校の従来の体育的行事よりも3時間多くなり、その授業時数は他教科の授業時数をあてて対応する形となった。
- Bloom,B, Hastings,J, Madaus,G (1971) Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Learning. Macgraw-Hill. NY.
- Casey,A (2014) Models based practice:great white hope or white elephant ? Physical Education and Sport Pedagogy, 19(1) : 18-34.
- Fernandez-Rio,J, Menendez-Santurio,L (2017) Teachers and Students' Perceptions of a Hybrid Sport Education and Teaching for Personal and Social Responsibility Learning Unit. Journal of Teaching in Physical Education, 36: 185-196.
- Goodyear,A (2017) Sustaine Professional Development on Cooperative Learning: Inpact on Six Teachers' Practices and Students' Learning. Research Quartery for Exercise and Sport, 88(1) : 83-94.
- Hastie,P, Calderon,A, Rolim R, Guarino,A (2013) The Development of Skill and Knowledge During a Sport Education Season of Track and Field Athletics. Research Quarterly for Exercise and Sport, 84: 336-344.
- 岩田昇太郎 (2011) 教員養成のスタンダードづくり. 日本体育科教育学会 [編]. 体育科教育学の現在. 創文企画 : 東京. pp.223-238.
- 梶田叡一 (1983) 教育評価. 有斐閣.
- コルトハーヘン, F [編] 武田信子 [監訳] (2010) 教師教育学理論と実践をつなぐリアリスティックアプローチ. 学文社 : 東京.
- 公益財団法人日本オリンピック委員会 (2014) JOCの進めるオリンピック・ムーヴメント. 公益財団法人日本オリンピック委員会. <https://www.joc.or.jp/movement/data/movementbook.pdf>. (参照日 : 2019年11月3日).
- レイブ, J, ウェンガー, E [著] 佐伯 胖 [訳] (1993) 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—. 産業図書.
- Lund,J, Tannehill,D (2015) Standards Based Physical Education Curriculum Development 3rd Edition. Sudbury, MA: Jones and Bartlett Publishers.
- Macphail,A, Deenihan,J (2017) The Influence of Organizational Socialization in Preservice Teachers' Delivery of Sport Education. Journal of Teaching in Physical Education, 36: 477-484.
- Metzler,M (2011) Instructional models for physical education 3rd Edition. Holcomb Hathaway: Arizona.
- National Association for Sport and Physical Education (2009) National Standards & Guidelines for Physical Education Teacher Education 3rd Edition. NASPE publishers.
- 岡出美則 (2011) 体育カリキュラムモデルとカリキュラム評価. 日本体育科教育学会 [編]. 体育科教育学の現在. 創文企画 : 東京. pp.57-71.
- 佐藤 学 (2006) 学校の挑戦—学びの共同体を創る—. 小学館.
- シーデントップ, D [著] 高橋健夫 [訳] (2003) 新しい体育授業の創造. 大修館書店 : 東京.
- Siedentop,D Hastie,P,Han van der mars (2011) Complete Guide to Sport Education 2nd edition. Human kinetics. Champaign.
- スポーツ審議会(2017) 第2期スポーツ基本計画(答申). [http://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/01/1382789\\_003\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/01/1382789_003_1.pdf).(参照日 : 2019年11月3日).
- 鈴木菜々・岡本美和子・重田唯子・鈴川一宏 (2017) 新任養護教諭が抱える困難とその対処に関する研究. 日本体育大学紀要, 46(2) : 37-149.
- 和田博史 (2016) ダリル・シーデントップ (Daryl Siedentop) の体育論の成立と展開—プレイ体育論とスポーツ教育モデルに焦点をあてて—. 日本体育大学大学院体育科学研究科博士論文.
- 和田博史 (2018) 我が国のオリンピック・パラリンピック教育の推進に関する検討—シーデントップによるオリンピック教育の活用可能性—. オリンピック文化研究, 3 : 35-45.

(2021年1月21日受理)